



## “越後”銘の石灯籠から

氏子である市内諸沢地区はもちろんのこと、久慈川流域の地域住民に厚く信仰されてきた西金砂神社。山頂の本殿に至る急な階段を見下ろすように、一對の石灯籠が建っています。台石には、大きく“越後”の文字。なぜ、越後？

### ◆石灯籠に刻された文字

この目立つ場所に設置された美しい石灯籠には、「奉獻 越後」[嘉永五年（1852）歳次 壬子冬十一月十二日]とあり、台石の背面には「世話方 木村小八郎 同 中嶋藤衛門 石工 渡邊半三〇（破損により1字不明）」、奉納した越後人として「関金六 川口惣衛門 松永卯七 鶴巻久次郎 知野庄兵衛」「関弥吉 川口栄次郎 松永浅七 関仙左衛門 近田庄吉」の名が彫られていました。

世話方のひとり中嶋藤衛門は、諸沢の粉菟蓼発明者 初代中嶋藤衛門から3代目に当たる人物、木村小八郎は、明治22年（1889）諸富野村（現在の諸沢・北富田・西野内）成立時に初代村長になった人物と思われる。藤衛門が世話しているからには、菟蓼関連と想像はできるものの、経緯は全く不明でしたが、間もなく、偶然に明らかとなりました。

### ◆特産品の流通と人の交流

それは、実家が太子にある市内在住の方との立ち話。「新潟県加茂市の郷土史家が、江戸時代から明治にかけての奥久慈地域との菟蓼取引に関する調査に来た」というもの。もしやと思い、西金砂神社の石灯籠の話をして後日写真を見せると、越後の人 川口惣衛門は自分の高祖父であると驚き、灯籠を奉納した人々が越後国蒲原郡加茂村や上条村（今の新潟県加茂市）で、大量の菟蓼の仕入れや仲買を行っていた豊かな商人たちであることが明らかとなりました。越後加茂の商人たちの中には、明治になって太子に移住し、粉菟蓼や楮の仲買商として、一層成功した一族もあったのです。

では、なぜ新潟県の加茂では菟蓼の商いが盛んだったのでしょうか？

それは、加茂・上条の特産品であった元結や水引を作る折の糊として、粉菟蓼を大量に必要としたからとのこと。細く切った紙にきつく摺りを掛け、糊で固め

た元結や水引は、髷の結束や祝儀袋に掛ける結び飾りに使う紙繕りで、特に元結は男女の髪型が近代化するまで、需要の高い日用品でした。菟蓼糊を使ったものは、米・麦糊製のものより水気に強く、丈夫で重宝されたといえます。

ちなみに、原料の主体である紙は、加茂周辺の村々で漉き出されたものを使用したそうですが、原料の楮の現地調達は不足気味だったようで、当地産の楮も商いの対象となっていたようです。

越後商人たちと、産地に設けられた会所で領内の菟蓼専売の任に当たっていた地元有力農民達は、書簡の往復はもちろん直接の往来もあり、親しい交流が生まれていたと考えられます。西金砂神社への石灯籠の奉納も、このような交流の中で行われたのでしょうか。

### ◆関鉄之助 越後で捕縛さる

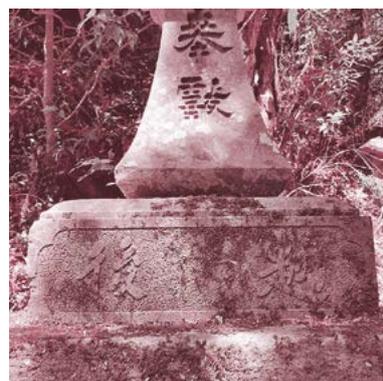
藩の特産品の流通に伴う人々の交流は水戸藩士にも及んでおり、幕末の著名な学者でもある青山延寿も加茂を訪れています。

水戸藩の北郡奉行所で郡務方を務め、当時袋田村にあった菟蓼会所の頭取で山横目の桜岡源次衛門らとも親しかった関鉄之助は、脱藩し、安政7年（1860）3月の桜田門外での井伊大老暗殺首謀者のひとりとなります。各地を潜伏しながら水戸領内に戻り、袋田の桜岡家等にかくまわれます。

翌文久元年（1861）5月に水戸脱藩士らがイギリス公使らを襲撃した東禅寺事件によって、藩存亡の危機に立たされた水戸藩の脱藩士探索は極めて厳しくなり、領内に留まることのできなくなった関鉄之助が向かい、ついに捕縛されたのは、越後の岩船郡湯沢（現関川村）のひなびた湯宿でした。逃亡の陰には、奥久慈の有力農民たちの支援と、特産品を通じて彼らと交流していた、越後商人の手引きがあったかも、と、石灯籠の文字に導かれて想像を膨らませました。

### 【主な参考文献】

関正平「水戸藩士となった市川正太郎と加茂上条の菟蓼」・「加茂上条の菟蓼は袋田・太子から」『加茂郷土誌 第31・32号』（平成21・22）加茂郷土調査研究会



▲西金砂神社石段最上部にある石灯籠の銘「奉獻」「越後」